

参加型学習の光と影

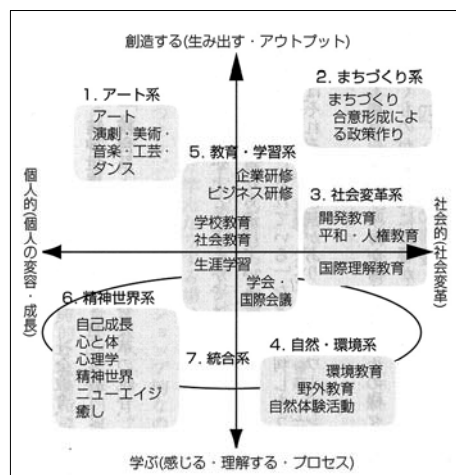
渥美公秀(大阪大学コミュニケーションデザインセンター)

はじめに

私は、グループ・ダイナミクスという分野について、小集団活動とリーダーシップとか、現場のグループなどとかかわって専門に勉強してきました。

「ワークショップ」という言葉は最近、「アロマセラピーのワークショップ」など、いろいろなところで使われています。われわれが実践したいのは、中野民夫さんが『ワークショップ』（岩波新書）の中で分類をされている表でいうと、外向きで能動的な社会変革のところに目標を置いたものだと考えています（図参照）。

今日お話しする内容は、いろんな参加型体験学習の場に出させていただいて感じた印象というぐらいにお聞きください。本来なら、これに肉付けをしたり、先行研究を調べたりすれば研究としてなりたつかもしれませんが、まだ取り組めておりませんので。



図：「ワークショップ」中野民夫、岩波新書

1. なぜ今、参加型体験学習なのか？

まず「なぜ、今か？」。大学で教えていると、どうも若者たちの中には状況的理解、「行ってから考える」タイプの人が多くなっているなという気がして、その若者たちに参加型体験学習が「受ける」ということがあります。つまらない理由と思われるかもしれませんが。

たとえば、内蒙古自治区に植林に行くエコツアーを企画している後輩がいるのですが、年配の参加者はだいたい「内蒙古はどういうところか、どんな木を植えるのか」といったことをいっぱい調べて参加されます。構造的な理解、「系統だって学ぶタイプ」という言い方ができるかと思います。文字で学んで来るわけです。一方、学生は「何をしにきたの？」と聞けば「ちょっと環境問題に関心があつて…」とか「中国へ行ける」というだけの動機で来ているといったふうに、適当なものです。

しかしツアーの帰りに感想をきいてみると、構造的な理解のタイプの方は「本に書いてあった通りの木がなかった」「この植林の仕方ですら本当に環境に役立つのか」等々、わりと不満を言われたりします。状況的理解の学生たちは「楽しかったから、また来ます」というふうな感じです。結局、また来て継続的に関わることの方がいいんですね。状況的理解というのは、いいかげんと言えばいいかげんですけど、このやり方の方が今受けると感じています。

次に「なぜ、参加・体験か？」ということについては、1つの考え方に過ぎないと思いますけれど、「人称化の装置」となるからです。たとえばカエルの解剖をするというとき、単に「カエルの解剖をする」というのではなく「〇〇ちゃんの飼っているカエルを解剖する」というふうにカエルに所有の人称が出ると、ピンとくる、学びが深まる、というようなことです。

そして「参加・体験すると、どうなるのか？」ということでは、主催者のねらっていたものとは違う副産物が得られるというのもおもしろい点です。プロセスの中での学びがあるわけです。だからこそ1回きりで終わったらもったいない。副産物が出たら、それをふりかえり、伸ばしていった方がおもしろい場合が結構あります。

2. ワークショップ論（研究史）

●グループ・ダイナミックス

日本でグループ・ダイナミックスを専門に研究されている流れとしては、九州大学の流れと、南山大学などで頑張っておられる先生方がいらっしゃいます。

私は九州大学の流れです。①集団のリーダーシップはどうなっているか、②どういう要因が働いているか、③それを現地で調べてみよう・実験してみよう・企業に応用してみようというふうに分析的に考えていったグループです。「その要因を追求する」ということで、どんどん実験室にも向かいました。

もう1つの流れは、センシティブティ・トレーニングとかTグループとか、グループで話し合いをしていたらいろいろ気づきがあるということについて、もっと臨床的に接していったグループです。

グループ・ダイナミックスの始祖は、クルト・レヴィンだと言われています。ドイツ語を話すユダヤ系の方で、彼が、1940年代初め頃にアメリカへ亡命し、グループ・ダイナミックスというものを始め、小集団研究をしました。

彼は、「場の理論」を「 $B = f(P, E)$ 」という式で考えました。誰かの行動が変わるということを考えるには、『P (personality パーソナリティー)』、つまりその人の人格、性格と、『E (environment エンバイロメント)』、どんな状況にあるのか。このPとEの両方を見なければわからない、ということです。

それまでの伝統的な心理学は、Pだけをみていた。その人の性格を調べて、その人の生まれを調べて…というふうに1人をフォーカスしていたのですが、「状況、環境によってちがう」ということをこの時期に言ったというのはすごいことです。クルト・レヴィンがナチスの世界を見てきて、アメリカの「自由」な世界を見たということは大きかったのではないのでしょうか。

この式が、社会心理学を支えるアイデンティティーにもなっていきます。「場の理論」として、統一的に理解しようとしたのです。「場の理論」というのには、「集団の場」というものもありますし、「頭の中の場」もあります。「今、頭の中の左隅から右の片隅の方の目標に移動しようとしているけれど、どうも頭の真ん中へんに嫌な記憶があつたりして、抵抗があつて、なかなか向こうへ行けない」など、頭の認知の場を考えたり、この中での力関係を考えたりという、「場の理論」というものをつくっていきます。

●アクション・リサーチ

クルト・レヴィンはアクション・リサーチということをやっていきました。「計画・実践・評価・修正・適用」というものです。

レヴィンのグループは現場主義で社会実験を行いました。

戦争の時、アメリカでも食糧がなくて困っていたそうです。それで、当時はアメリカでは牛のレバーを食べずに捨てていたのですが、「牛を1頭殺すなら、ちゃんとレバーまで食べよう」というふうに食習慣を変えることを目的とした社会実験をやりました。異なるグループをつくって、あるグループは講

義や資料を配って議論する参加型、別のグループは同じように議論をして最後に、「今後どうするかを言ってから帰ってください」というふうにしました。「レバーを食べます」とか、「イヤだけれど週に1回ぐらい食卓に出してみましようか」とか、集団決定をする。レヴィンは肉屋に行って、どのグループがレバーを買いに来るか待ちかまえていたところ、「どうするか」を宣言して帰ったグループが来たそうです。そこで「場の理論」で考えるわけです。「場の中で1つ位置づけが変わった」ということです。

リーダーシップについての実験も行われました。子どものグループを3つつくって紙飛行機をつくらせる。その時、早くできるか、きっちりできるか、満足度はどれぐらいかを測っていくわけです。1つのグループはほったらかし。1つのグループは専制的、「こうやれ、ああやれ」と指示する。1つのグループはみんなで決めようという民主社会。結果、民主社会のグループが一番満足度も高く一番いいものをつくったということです。

センシティビティ・トレーニングは、偏見を意味したような文章と一緒に読み、「どこが問題か」を一緒に討議する、というものです。今のワークショップのようなものです。

いろいろあるのですが、アクション・リサーチの「計画・実践・評価・修正・適用」という流れが、ワークショップに生きているのだらうと思います。

このように現場でやっていたことから、その原因・要因を追究するような研究をするために実験室に入り、それがもう一度揺り戻しで私のような者が災害現場に行って考える、というふうに研究がすすめられています。

3. 伝えるための「仕掛け」の工夫

阪神淡路大震災があったとき、私は西宮に住んでいて、ボランティアをすることから始まってボランティア・ネットワークの形成、NPOの結成などに現場で取り組んできました。そこから、災害に関わって「何かを伝えるとはどういうことか」、院生のみなさんと一緒に研究をしています。

災害・防災に関して、「自分の身は自分で守る」「防災をするのは市民の義務」「広範に呼びかけて参加を促す」といったことが普通、言われます。でも、普通言われていることに疑問符がつくときに、新しいものが開発されるんだらうと思うのです。

たとえば「自分の身は自分で守る」というのは正しいことです。けれどそれを、障害のある方や高齢の方など、助けの必要な方の前で講義するということには、クエスチョン・マークが付きます。

「防災をするのは市民の義務だ」ということも、それだけを取れば嘘を言っているわけではないんですけど、「本当か？」という話です。神戸大学の近くでワンルーム・マンションがたくさん建っているのですが、震災後、「その住人が防災訓練に参加してくれない」と地元の人が怒っているのを聞きました。それで私は「それは当たり前でしょう。揃いのハッピーを着て、おっちゃんが腕を組んで座って待ってるようなところに、なんで学生が来ますか？」と言ったんです。そうしたら「防災は市民の義務とちがいますか？」という言葉が返ってきました。しかし、そんな言葉を100回繰り返しても、絶対参加してくれないと思ったので「ちょっと違う工夫をした方がいい」ということで、考えていきました。

防災は「やらなければいけないことベスト10」の中には入るんだけどトップ・ワンにはならない。防災なんて明日来るとは限らない話を「義務だ」と言われても、人々の「やらなければいけないこと」は、「明日の支払い」とか「明日の子どもの送り迎え」です。「平和」とか「人権」についても、同じようなことが言えるかもしれません。

そこで、生活に埋め込んでみたらどうか？という発想で考えました。防災をやっているという気にな

らないのに、気づけば防災ができていますというふうにやろうと。キャッチフレーズは「〇〇と言わない〇〇」です。ここに「人権」を入れてもいいのではないのでしょうか。われわれNPOは「防災をやりたい」と切なる願いを持っているわけですが、一般の方々に言うときには「防災、防災とガミガミ言わないでやってみよう」ということです。要するに仕掛けとしてワークショップを使っていくということです。

●「わが街再発見ぼうさい探検隊」

ひとつ事例をご紹介させていただきたいと思います。

もともと「わがまち再発見ワークショップ」という名前で、私たちがやっている「日本災害救援ボランティアネットワーク」というNPOがつくったワークショップです。この実践について講演をしたところ日本損害保険協会の方にすごく感銘を受けていただきまして、何百万円もかけてビデオをつくって朝日新聞に持ち込んでくださいました。それから毎年1回、「全国マップ・コンクール」というのをしています。その時に、損保協会さんから、一応「防災」という言葉を入れてほしいというリクエストがあり、「わが街再発見ぼうさい探検隊」としました。「マップ・コンクール」は2004年度から毎年行われ、阪神淡路大震災のあった1月17日頃に表彰式を行います。文部科学大臣賞、防災担当大臣賞、朝日新聞社長賞等、賞が出ます。2006年度は1000校から申し込みがありました。この実践は、英語に訳していただきユネスコ・世界防災会議にも送っていただきました。

須磨の子ども会でやった際の例で、ワークショップの流れをご紹介します。

金曜日に大人たちが準備をします。土曜日の朝、ボランティアとして関わってくださっているお父さんが、集まった子どもたちに話しかけます。「最近このへんに引っ越してきたんやけど、みんなどこで遊ぶかなあ」という感じです。子どもたちは「公園行ってる」とかいろいろ言います。「おっちゃんはこのをあまり知らんから探検しようか」と言ってだんだん盛り上げていきます。子どもたちには探検隊手帳・突撃インタビューシート・大発見シール・デジカメとかを渡しています。それで、おじさんを公園へ連れて行ってくれるのです。

子どもが連れて行ってくれた公園には防火水槽がありました。「しめしめ」という感じで、それを子どもたちに発見させていくのです。「大発見ちゃう？あれ」とか言えば、子どもたちは「大発見」と言って探検隊手帳にシールを貼ったり写真を撮ったりします。そこへ消防のおじさんが歩いてくるわけです。それで「あのおじさんに突撃インタビューしようか？」というような感じで進んでいくわけです。「子ども110番」の家に行って話を聞いたり、なぜか集まっている消防団の人たちの前を通りかかって「〇〇のお父ちゃんが消防団やった！」ということがわかったりとか、そういうことをしながら帰ってきます。

それからみんなで地図をつくるのです。小学校1年生・2年生は、このへんで集中力がなくなりました。流行のピカチュウとかを描いていましたけれど。そして、発表します。「さざえぼんの大冒険」という一見防災とは関係のないタイトルの地図を発表したグループもありました。しかし内容は立派な防災マップになっている。もう1つの地図は小学校6年生が意図に気づいて「災害防止マップ」と書いています。

お母さんから褒めてもらったり消防車に乗せてもらったりして、子どもたちは楽しい日を過ごします。帰り際に、関西電力さんからいただいた「わが家の防災」を「おかあちゃんに言うときや」と渡します。親御さんに防災の探検隊だったことを知らせます。

以前、「マップ・コンクール」で高槻市の小学校が1校、賞をとったことがあります。その地図の

中には、いっぱい子どものボヤキが書いてあったのです。「避難所って行ったけれど、鍵開いてへんやん」「川縁の避難所、洪水のときはアカンやん」等々書いてあるのが、おもしろいということで、防災担当大臣賞をもらいました。ルールは、模造紙1枚というだけです。特別賞もあります。神戸市長田の小学校からは、模造紙をつなげて焼けた家ぜんぶを描いてきました。これはすごい、と思って、ルールを破っているのですが特別賞を出しました。やっぱり、何かを感じてやってくれている思いがすごく伝わるので、いいコンクールになったかなあとと思っています。

この実践のポイントは、二重性です。実のところ、子どもが消火栓や防火水槽の場所を知ってもほとんど意味がありません。備蓄倉庫を開けても、子ども自身が使うことはない。「子ども探検隊」の前に大人を集めて準備をすることがミソなのです。子どもだけではなく、大人も（が）学ぶという二重性があるのです。大人に「防災についての講義をしますからきてください」と言えば、いつも来る人しか集まりません。しかし「子ども探検隊で子どもたちがまちを歩くので、道路が危ないところもあるので手伝っていただけませんか」とか「消防署にあいさつに行っておいてくれますか」等々、「子ども探検隊」の日が来る前に、大人が学ぶことになるのです。「防災と言わない防災」とは、こういう意味です。

他にも年齢別でいろいろな仕掛けをして防災について伝える実践をしています。何か相手に伝えたいと思ったときに、真正面からいくのではなく、半ばふざけていると笑われるかもしれませんが、こういうことをやりながら伝えていこう、という趣旨でやっています。

4. 事例紹介 クロス・ロード

参加型体験学習で、成人男性などがなかなかのってこないということがあると思うのですが、ノリがいいものに「クロス・ロード」という私の友人のグループが開発したワークがあります。参加者にジレンマが書いてある「質問カード」を配り、『イエス』と『ノー』のカードのどちらかをあげてください」というものです。質問カードには全部、神戸市職員の実体験を書いてあります。

たとえば「地震が起きました。仮設住宅を建てなくてはならない。学校の校庭に仮設住宅を建てることに對して、あなたは賛成ですか反対ですか」というカード。当然、意見は分かれるわけです。議論をしていきます。

「イエス」と「ノー」が5対3なら、人数が多い方の「イエス」に上げた人に点数がいくんですけれども、1人だけ「イエス」と言って他が「ノー」と言った場合は、この1人だけに一番いい点数がいくようにしてあるのです。すると、みんな裏をかこうとして、一生懸命自分は独特のアイデアだと言いたがります。参加者は結構のってきます。

このカードについては実際には、神戸市は仮設住宅を学校のグラウンドに建てなかったんです。芦屋市は建てました。そういう本当の事例を紹介して、どちらもよい面と悪い面があることを説明し、「どっちが正解だと言われると困りませんか?」「答えをどっちかに決める必要はないんじゃないですかねえ?」という説明をします。

クロス・ロードで、一番ねらいとしているのは、答えがないということを知らせることです。考え方が多様であることを知ってもらうのがねらいなのです。

いろいろな質問カードをつくることができます。たとえば「あなたは、夜酔っぱらって帰ってきました。家には、あなたが『近所の人のためにつける』と主張した街灯がついています。ところが奥さんから『給料が安いのに飲んで帰ってきて。電気代がかかるから街灯の電気も消して』と言われました。消しますか?」という話です。一晩街灯をつけておくといくらかかるかも書いてあります。この値段なら

一晩つけておいた方がいいという程度の値段なのですが「そうやって奥さんに言われたら、地域の安全よりも奥さんの方をとるか？」というジレンマを考えるわけです。他に「パトロールをされていて子どもに声をかけたら『うざったい』と言われ、子どもは走って逃げた。あなたはパトロールを続けますか？」というものも作られました。

これは大人でないとピンとこない問題ですよ。しかも、成人男性は自分の意見を主張したいという意欲がある人が多いので、それが引き出されるところがいいみたいです。

このワークについては、独自に同和問題のものをつくれるのではないのでしょうか。

5. 参加型体験学習の影

では、参加型体験学習、ワークショップについて「影」といえる部分について、中野民夫さんが指摘されている4点と、私が経験から考えた6点、についてご報告します。

中野民夫さんは「ワークショップの限界と注意点」として、4点、挙げられています。

まず「ワークショップ中毒」。これは、ワークショップのある研修で、なにかわかった気になる、自分が変わったと思うのだけれど、日常の現実は厳しいので、「非日常」のワークショップにまた行きたくなる、つまり中毒になる、ということです。あり得るなあと思いました。

2つめに「帰ってから何をするのか」がポイント。防災のワークショップをご紹介しましたが、参加者が家に帰ってから防災のことを忘れていくということでは意味がないです。

3つめは、正解強要主義はダメ。これは当たり前ですね。参加者を非日常の世界に置いて、過激に追い込んで「我を失う」よう強制してから、「正解」を注入するというのは洗脳の手口です。ワークショップもある程度、共通する部分がありますから、「1つの感じ方を正解や絶対的なものとして想定することは慎むべきだ」と中野さんは指摘されています。

4つめは、参加者の心構えとして、「そんなふうな話はない」という当たり前のことを肝に銘じておくことが必要だということです。ワークショップで行動案を考えると、うまくいきそうな気がしてしまうけれど、それで難しかった人間関係が一気に解決されたり、理想的な自分に大変身したりするはずはない、ということです。

さらに、私自身のこれまでの経験から考えた「影」は、まずマニュアル至上主義です。いろんなワークショップをやらせていただけていますが、熱心な方ほど「マニュアルをくれ」と言われるのです。お渡しすることもあります。その通りにやろうとされる。それでいいのでしょうか。

2つめに、振り返りの欠如。たとえば2時間のコースをいただいて、予定よりも質問が出て時間が押してきて、振り返りの時間がなくなって、結局、消化不良で帰ってしまうというものです。これさえやっておけば定着したのになあということが現実によくあります。

3つめに、企画者と参加者の違い。「もし月へ行く宇宙船が遭難したらどうするか？」なんていうワークをやったりすると、こっちは一生懸命準備してやっても、参加する方が「なんで月へ行かなあかんねん」と思われていたら、「今日は月の話でしょうもなかったなあ」と、主旨が伝わらずに終わってしまう。

4つめに、少数意見の排除。ワークショップで模造紙に何かを書いたりするとき、参加者が何かを一生懸命主張しようとしているのだけれど、ファシリテーターが「その意見とこちらは似ていますよね」と言ってまとめてしまう。すると、その人は言う気もなくなる、というようなことを無意識にやっつけてしまっているなあという気がします。

5つめに、「味わう」だけで創造的になれない。さっきの「ぼうさい探検隊」は、10年前に考えたアイデアです。そろそろ次のネタをやろうよとされているのですけれど、自分の十八番（おはこ）ができてくるとそれ以上のことがやりにくくなっていくのです。

6つめに、現場はワークショップのためにあるのではない。ワークショップに限らず、体験するために現場に行くときに起きることです。高齢者施設の方の訴えでこういうのがありました。小中学校の先生から、2月頃「今度、3限にうちのクラスを連れて行くから面倒をみてくれへんか」という電話がかかってきたそうです。その電話の話し方自体失礼だった上に、3限っていつ？目的は？何人ぐらいくるの？といったことがまるでわからないような依頼があったそうです。

6. 学びの範囲

「ワークショップでどんな学びがあるんだ？」とよく言われます。2つあるんじゃないかと思います。

1つは、ワークショップで取り組んだ事柄が日常生活に引き継がれ、生かされるということ。人に話しかける話し方を勉強したら、話し方が上手になるというのは一次的なモードだと言えます。

そして、ワークショップでは二次的な効果が大事です。ワークショップに参加した「実感」が、その内容とは関係ない場面において「一般化」されるということです。

ワークショップでも振り返りの時間もないとあまり意味がないなあ、マンネリ化しているなあと悩む面もありますけれど、参加した人たちはワークショップの中身以外にも学んでいることは多いと思います。だから、改良を重ねて続けていければ良いなあと思っています。

■ 討議

上杉 今までの人権教育は、どちらかというと、何もわからない状態の人にどう理解してもらおうかというところから始めたところがありますよね。

参加型学習では、ある程度理解していて、講義だけではどうも満足できない人とか、むしろ逆に固定観念に固まってしまっている人の考えを解きほぐすという意味はものすごくあると思うのです。けれど、今あちこちでやっている参加型学習をみていると、初心者の人にいきなり議論をさせてあまり深まった話し合いができないままだったり、それで人権というものについての理解が深まるのか不安なものもあります。

栗本 ファシリテーターの力量によるのではないのでしょうか。先ほど渥美さんから「マニュアル至上主義」「正解強要主義」というご指摘がありました。同じ教材でも、使い方違うわけですよ。ギチギチに参加者を追い詰めるような進め方をした挙句に「ほら、みたことか。君たちダメじゃないか」と前に立っている人がやっちゃう可能性はある。

上杉 限られた時間の中で結論みたいなものを求めたい、出したいとあせると、そういうふうになりますよね。

渥美 逆効果ですよ。

栗本　　そういうのを受講されて「参加型体験学習は最悪」と思われた感想を聞くと、「これは教材とか手法の問題ではなく指導者が悪いんやろ？」と思うのです。

その辺、教材の課題と、指導者というか使う側の課題があると思います。

渥美　　クロス・ロードを開発したぼくの友人と話をしていたところ、こういう批判があったそうです。1つは、そんな紙に書いてある状況を思い浮かべて、それを議論して「イエス」「ノー」と言ったりしても、現場でそんなことが行われるとはとうてい思わない。いかにも学者が机で考えた教材ではないかと批判されたことがあります。

もう1つは、忙しい中、参加しているのに、答えの1つも言ってほしい。しかも「防災」がテーマだと、こうしたら命を落としませんよ、命が救えますよといった方法と正解を期待してこられている。それなのに「答えがないことを知れ」というのは詐欺ではないかと。詐欺とまでは言わないにしても、「すごく残念でした」という方がいらっしやいます。

それで、バージョンを変えなければいけないんじゃないかと話し合っています。きょうは答えが求められていると思えば、極端でも答えがあるようなしゃべり方をして、「例外もありますよ」という言い方をしていく。きょうは「何か考えたい」というムードがあるなら、「両方答えですよ」という言い方をしていくというふうに、やり方で変えるしかないかなあと話しています。

現場へ出たときに、参加者の意図をうまく察知できなかつたりずれたときには、お互いあまりよい時間にならないことはありますよね。参加型体験学習で自分をさらけ出してしまった分だけ。

栗本　　参加者が出す分、ダメージも大きいというか。

渥美　　そうですね。「楽しく」「気持ちよく」帰ってもらわないといけないはずなんですけど、さらけ出して恥ずかしかっただけみたいに帰られたら、ちょっと…。

栗本　　「楽しい」ということに関わってですが、先ほど一次モードと二次モードというお話がありました。特に人権啓発の分野でワークショップが盛んに取り入れられたのは、二次モードの楽しさがあるからだと思うんです。一次モードで言われることは、結構しんどいんですよ。「あなた、日頃差別をしていませんか。人権尊重のために何をしていますか」ということを問われるのはしんどい。

私はファシリテーター・トレーニングのときは「その場自体が人権が尊重される場であることを大事にしましょう」と言うんです。人権教育の4つの側面で言えば、学ぶ場自体が人権を尊重した場であることが大事だという意味です。少数意見とかも含めて、できるだけ丁寧に拾い上げる場をつくるとしますよね。だから参加者は居心地がいいんですよ。それが、中野さんの言われる「ワークショップ中毒」につながると思うんですけど。「この研修やったら責められへん」「私の意見きいてもらえた」といった充実感が、学びであるかのような達成感にすり替わってしまっただけ。それが、人権啓発で参加型がすごい隆盛している理由の1つかなと思います。でも、それには危うさがありますよね。

渥美　　そうですね。「楽しかったな」だけではね。

上杉 「楽しい」ということに関わっていうと、私ではなかったのですが、ある先生が同和教育の授業で「笑う」ようなものを出していった。そしたら「先生は不真面目だ」と学生から糾弾されたというんです、昔の話ですが。今はそうではないと思いますけれど、そういうイメージのある人は結構いると思うんです。

栗本 厳しい差別の現実があるのに、ニコニコ笑いながら学ぶとは何事だと？

上杉 ええ。非常に生真面目というか固いというか…。

事務局 私の聞いた話では、「あなたが難民になったら？」という設定のワークをやっていたときに、被災体験のある方がご自分の体験と重なって「こんな内容で話し合えません！」と怒られたという話を聞いたことがあります。

今つくっている教材でも、「差別について考える」とやっても、その場に本当に結婚差別を受けた人がいるかもしれないときに、この設定で話し合うのはどうなのか、という疑問は、常に出てくる話だと思います。

ただ、参加者に深く考えていただくためには、わざと葛藤を生むような状況を設定するわけです。「もしこれが自分の子どもなら……」とか、参加者が引きつけられるテーマにして真剣に考えてもらわないと意味がない。

時岡 私は大阪の府民意識調査の委員をしたわけですが、「人権という考え方がとてもいいですね」と解答する人が、もう片方で「差別に関して肯定的なことを言っている」という結果が出ています。だから、人権人権と言っているだけではダメですねということを、講義をするときなどには一生懸命言っています。要するに、地球の反対側の人の話題については、テレビを見ながら涙を流して「あの子どもかわいそう」といったりするように入権はすごく大事だと思っても、隣の在日外国人の人権については「国に帰れ」といったりする。そういう人はきっと、「自分の人権意識は高い」と思っているわけです。

栗本 ワークショップではそこを突く工夫をします。「人権、大事」といっている参加者に、「じゃあ、あなたの隣のこの問題はどうですか」と問いかけ、突いていくわけです。そこを突かれると参加者はやっぱりしんどい。先ほど渥美さんが最後に話された「二次モード」的なところの楽しさが参加型体験学習だと思っている人は、動揺されると思います。

子どもの人権についてやると如実にそうした意識が出ますよね。虐待報道を見て「ありえない！」と言いつつ、どれほど子どもの人権を尊重しているのか。

実際に、研修で私がやったのは「スーパーで買い物をしていたら、近所の人が菓子売り場でダダをこねている子どもに怒鳴ってパンパンたたっているのをみた。あなたはどうしますか？」と、問いかけたことがあります。「子ども虐待について考える市民のリーダー養成」という講座でした。けれど参加者は「そんなん、ご近所の人に何も言えません」といった意見でした。虐待について考える意欲のある人たちでも、そんな感じです。

渥美 そうした課題を考えていくのはいい研修ですね。

栗本 でも、答えはないんですよね。

事務局 たとえばセクハラの講義で「関係性によって違う」と言ったら、「それじゃ困る」という反応がよくありますよね。けれど、そういう本などで学んだだけでは判断が難しい関係性だとか問題の本質性を学ぶのに、参加型はむいていると思うのです。何かうまい仕掛けをやって、それを考えていくという必要性を本当に感じています。差別についても、参加型体験学習で揺さぶるようなことをしないと、本質的なところに考えを深めていけない、という真剣なニーズもあって、人権啓発で参加型体験学習が広がっていているということがあると思うんです。

上杉 別にいえば、答えが多様にあると思ってしまうとゲームが成り立たないところがありますよね。正解を求めるからゲームになるわけで。

栗本 「何でもありやん」みたいに思われてしまっただけではダメですよ。「正解がない」ということは、単なる「何でもあり」ではなくて、意見の多様性が尊重されるということです。人権の基準もなしに「もう、ええやん、なんでも」というのではちがう。

事務局 「多文化共生」という言葉が広がってくる中で、変な形で「ちがいを認め合うというなら、『僕は差別をする』ということも認められるべきだ」といった主張に使われているという話を聞きます。

栗本 さっきの少数意見のことにかかわるんですけど、強行に差別的なことを主張する人がいたときに、「なるほどねえ」と言っているのは人権研修にならない。

ときには、小集団の中で差別的な主張をする人の意見が強くて、他の参加者も流されそうになるということもあります。「ちょっと、それは困るで」という意見のときにどう介入するのか。

渥美 どう介入するんですか。

栗本 難しいですね。集団の力に期待するというか。全体に発表されたときに、他のグループから批判する意見が出ることを期待するとか。その差別的意見にある程度焦点化して「みなさんどう思われますか」と問いかけたり。時間が少ない場合には「個人的には…」という言い方で、私の考えを言うこともあります。ただ、その人の意見をたたきつづすことはできません。

渥美 そうですね。

栗本 ファシリテーターを誰がどのようにするかというので、内容はすごく変わってくると思います。私はファシリテーター・トレーニングを依頼されることもあるのですが、自分自身が経験的にやっていることを、どうトレーニングに取り入れるのか。むずかしいなと思います。

職人的な意味で技術的なところだけでも、まだまだ整理されていない部分がワークショップとかについては多いのかなあ、という感じはします。特に啓発とかで、指導者養成とかを言われるな

ら、職人的なレベルで持つべきスキルというのはもっと整理されてしかるべきではないかと。

それは一般的な体験学習法でもそうなんだけれど、そこにさらに人権ということがかかわってきたときに、自分自身が「人権」のエキスパートだとは思わないし、自分の中で問いつける自分なりの何かをもっていることが必要なんだろうなと思っています。

上杉 教師教育などは、最終的には教養の問題だと（笑）。昔の師範学校では、メソッドをしっかりと教えたわけです。しかし、それでいい教師かと言うと…確かに教えるのは上手だったけれど、それで広い視野をもつ人間が育ったのかといえはいえないですね。

渥美 ワークショップって、いくらひねってもそれほど奇妙なものが出てくるとは思えないんですね。これをやれば目の覚めるような人権教育ができたというのがあるはずないと思うので…。

栗本 あったら逆に怖い。

渥美 そうそう。そうじゃなくて、メタスキルみたなところをどうするかということ考えた方がいいのかもしれないね。

栗本 教材を出すときに、そこらへんもあわせて考えていくと、安易なマニュアル至上主義的なものから脱することができるのかなあと思います。

(2007. 11. 30)